



張主 今年度佛教界の望み どのように仏教をひろめねばならぬか

世界のすべての問題の最後の解決は宗教にある、という結論が、今年の春の有力なジャーナリストの圈内から発せられた。これには昨秋以来のインドのラダクリシナンヤ、英国のトインビー両哲人によつて示された東西思想の融合論などが強く反映していると思ふが、然し同時に世界の至るところで、頭打ちの解決策が、自然にうち出してきた最後案であるとも云えよう。大はスエズや東欧に起つた世界理想に反した現実問題から、小は市井の日常茶飯事に至るまで、相対的な解決策を超えた、融合やゆるし合い、さとり理想が無ければ、到底自由で平和な共存社会は打ち立てられるものでない。

▼宗教がなくてはならぬといふがしかし、それも未梢的な表現だけでは駄目だ。あらゆる宗教宗派は夫々の信証に立脚しながら、しかもその本質に横たわる合一性線起性に眼ざめなければ、それは曾ての剣をもつて立つた宗教戦士の亜流でしかあるまい。宗教の全一性にめざめて、もろびとのために献身するところにこそ宗教と宗教者の絶えざる歩みがあるといえよう。特にわれわれ仏者が、国内に、国外に、その理想をもつて推進と体现につくすところに、日本のあ

一、二月合併号 発行所 全日本仏教会 東京都中央区西船場三丁目(本館内) 電話(54)0331-3 発行人 岩野真雄 編集者 高橋忠雄 印刷所 栄昌堂

第四回世界仏教徒大会

ネパール会議報告

総会決議事項

- 一、WFBの本部の所在地は、変更することができる。
二、WFBの会長は、本部の所在する国の代表より選ぶものとする。
三、一九五六年(一九五八年の二年間に於けるWFB本部は、セロンに置くものとする。
四、一九五八年(一九六〇年の二年間のWFB本部はビルマに置くものとする。
五、一九六〇年(一九六二年の二年間のWFBの本部は、次回の総会において定めるものとする。
六、才五回の世界仏教徒会議は一九五八年タイ国において開催するものとする。
決定せる役員左の如し
一、会長 マララセーケーラ博士
二、副会長
一、インドーアナンガ・カウサリヤナ師
二、ネパールーアムリタナンド師
三、タイーブーン・デイスカル 太妃殿下
四、ビルマウ・チャン・トン氏
五、フランスーラウンズベリィ 女史
六、日本ー長井真琴博士
七、中国ーシエラブ・ギヤルシオ師
八、英国ークリスマス・ハンフレイズ氏
九、マライーケー・スー・ジン氏

宣傳部会決議事項

- 一、仏教の布教宣伝は飽く迄も世人の理性と経験とに訴えたものでなければならぬ。そしてそれは又寛容と善意とを忘れてはならない。
二、布教宣伝の方法には凡ての現代的方法を活用すべきである。但しその方法は布教対象が仏教徒であるか又は部分的に仏教徒であるか又は非仏教徒であるか又はかゝる対個人的な布教ではなく国際的な布教であるかによつて自ら異なるものである事を知るべきである。
ラジオ、写真の活用、各国の新開への仏教ニュースの掲載、各国語に依る書籍及びパンフレットの出版、及び講演会の開催等を推進すること。写真は優秀なる仏教芸術作品を複写することが効果的である。
a、仏教に関するニュースは可及的速かに報道され得るような機構を作ることが肝要である。
b、各国に共通する言語による書籍並にパンフレットを多量に又出来得る限りの廉価を以つて出版すること。これに関しては特に出版業者の協力を得るよう努力すること。
c、僧侶たる通俗人たることを問わず仏教に通曉するものを国外に旅行せしめ、非仏教国に対しては仏教の講演を行い、仏教国相互間に於ては意見を交換すること。
d、各国間に於て仏教の権威者僧侶及び学生を交換すること。特に学生の交換に関しては既にヨーロッパ諸国に於て実施されつゝある例に倣い各国政府がこれを援助すること。

- 一、右局に対する情報提供は凡て飛行便に依ること。右局の運営費は個人又は団体の拠出する一定の会費に依ること。
情報は右ニュース局に送ると共にロイター、AP等の国際情報機関にも提供すること。
二、各国に於ける仏教図書出版者に対し新刊予告をする様態進ずること。
三、右ニュース局は仏教図書の売さばきに努力すること。仏教徒は仏教図書に関する取引に対して十分なる経済的感覚を持つべきこと。
四、ニュース局は仏教古典の翻訳に關する情報を蒐集し之を公表すること。
a、パリー仏典の重要な部分を各国語に翻訳すること。
b、梵漢西日の大乘仏典を英訳すること。目下翻訳しつゝあるものは中間報告を行い同一経典に對する翻訳が二ヶ所以上に於てなされる努力の無駄を省くこと。
c、聖典以外の仏教書も翻訳すること。例えば鈴木大拙博士の著作は現在ドイツ語及びフランス語に翻訳されつゝある。
エスペラント訳も甚だ有益である。

d、仏教定期刊行物相互間に於ては出所を明らかにする限りに於てニュースをリプリントすることが出来ることを認めること

五、ニュース局発行のニュースは毎月一日航空便を以て各国に発送すること。

六、WFBは仏教美術の復興に尽力すること。

七、本部会は宣伝関係以外の左の条項に關し意見を述べんとするものである。

a、各国仏教徒は現代の世界思想を理解すべきである。

b、仏教徒は非仏教国に進出し、仏教を説くと共に非仏教国の思想宗教を研究すべきである。

八、仏教の各分派分団は相互によくその共通する教理を研究し、以つて世界仏教の確立に貢献すべきである。

教化部会決議事項

部会長 スリビチャルナ(泰)

一、本大会は、大聖釈尊の教旨が非暴力及び慈悲にあるに鑑み、世界平和確立に貢献する目的を達成するため、核兵器を戦争に使用することを永久に禁止すべき旨の決議を国際連合に送達すべきである。

二、時代の變遷と思想の進展とにより、仏教は二つの大きな派別、即ちテラヴァーダとマハーヤーナに分かれた。二派は儀式や戒律において異なるところもあるも、その基本となる教理は同じである。故に、この二つの派別をあらゆる言葉で全廃することに最善を尽くし、今後、全仏教徒は何らの形容語を前につけずに単に仏教徒と称すべきである。

三、本大会は、マハーヤーナとテラヴァーダという二つの派別

を結合するために、仏教徒の歴史を完全に研究することを目的とする仏教学者の委員会を任命すべきである。

四、本大会は、教化委員会と社会福祉事業委員会を任命すべきである。教化委員会は全世界に仏教を宣布することを目的とし、社会福祉事業委員会は各国の種々なる社会福祉事業を調査し、その成績良好なるものを撰び、これを各国に紹介することを目的とする。

(a) この二つの委員会の任期は、WFB総会間の二年とする。

(b) この二つの委員会の委員長は通信整理のためにWFB本部に置く。

(c) WFB加盟国は、必要な情報を集め、それを各委員長に報告し、各国間の資料を交換し、連絡をはかるため、この二つの委員会に委員を選出する。

(d) 各国の仏教々育の情報は次の項目を含むものとする

僧林、短期大学、大学の名称、所在地、職員、学課事業、仏教徒非仏教徒間の関係、仏教々師養成、仏教教学教師、学生、刊行物の交換。

五、本大会は、すべての国家があらゆる種類の侵略をしないことを国際連合に訴へべきである。

右の部会に属しない議題を審査する部会決議事項

部会長 中山理々(日)

一、五月の満月の日、即ちウエサカ祭日を今後毎年公休日とするようにパキスタン政府に要望することを決議する。

二、全世界の国家及び国民間に、平和、友好、交誼、親善を確立

するため、我々は世界のすべての国家及び国民が戦争による破壊を目的とする核兵器及びその他のあらゆる兵器を完全に廃棄することを要求する。

工業、農業、医療及び他の人道的方面の力として人類の利益のために使用される素晴らしい原子核の力は、世界のために祝福すべきものである。故に天然資源に対して人類の得たる近代のこの勝利をば、仏陀の教えたまえたように生きとし生けるもの、幸福に使用することを切望する。

三、全世界の国家及び国民が、大聖釈尊の教説せる五戒の精神を以つて、あらゆる協定、条約及び一切の口頭約束を、実際に心から且つ正直に実行すべきことを決議する。

四、五戒文(パンチャ・スィラ)を毎日唱へることによつて、その誓いの言葉を実行すると、しなやか、わらわらず、我々は根柢の聖語を思い出すのである。動物が我々自身の手によつて殺されたのではなく、消費品として他人の手によつて屠殺されたのであるという口実から、あらゆる種類の動物を食する仏教徒を我々は実際に見かける。この口実は殺生に対して間接の責任のある以上は口実とならない。五戒文を唱へる時の才一の誓いの言葉によつて殺生は禁ぜられてゐるのである。殺生が禁ぜられてゐる限り、我々はたゞ大聖釈尊の教説を、実際に且つ精神的に実行しなければならぬ。我々は如何なる種族にせよ、肉食を止め、我々の誓約を良心に基づいて実行し、大聖の教えたもうた正しき道を踏み、自らの良心に忠実であり、大聖の教えを守り

総会に緊急動議として提出された決議事項

一、本大会は、釈尊がネパール国ルンビニ園に降誕し、その園が聖域として荘嚴されている事実を、全世界の仏教徒が正しく一般に伝えることを要望する。

二、本大会は、ネパール国政府が国内にあるルンビニ園及びその他の仏蹟の保存に対して一層の努力を払うことを要望する。

三、本大会は、全世界の政府及び国民が、仏教徒国際的団結資金の設定及びその運営団体の設立に協力することを要望する。

(以上石川、村野氏提供)

インドの旅のおぼえがき

増 永 雲 鳳

(駒沢大学教授・文博)

(一) 会議の内容及び決議事項に対する所感

ネパールの首都カトマンズにおける才四回世界仏教徒会議の内容や決議事項の重点は(1)仏教精神に基く世界平和の確立(2)南北両仏教を一九とした全一的活動(3)五戒厳守による生活の浄化(4)あらゆる報道機関による仏教思想の徹底化等にあつた。これらの実行にはおのおの適切な機関を設ける。日本代表の提出した三議案は広く且つ強くこの大会に反映された。その内容や決議事項に反対する理由はないが、かくこうした大会は一片の決議に終つて実行を伴わないから我々は十分にそれを見守つて、その果敢な実践を強力に要請しなければならぬ。この大会において我々の遺憾に思うことは、日本の如くその背景に多くの教徒を持つている代表が、あまり重要視され

ず、背景もなき二三の個人にキャステインポットが取られたことである。今後の代表にはエリートを選ぶ必要が痛感されるが、日本の仏教研究の事情や一般の情勢が彼らに十分理解されていないことも一原因をなしている。この間隙をぬつて二三の個人が大会の牛耳を取りやすいから、今後を警戒して日本仏教の代表機関は十分に注意し、厳然たる態度をとるべきである。結局私は(1)この大会の決議は直ちに機関を通じて実行に移すこと(2)研究調査に關する委員会は速かにその行動を開始すること(3)今後の代表には識見卓抜なものを選ぶこと(4)語学に堪能(特に英会話)なものを選ぶこと(5)大会に臨む以前提案を十分に審議しておくことを切に要請したい。

(二) インド旅行の所感

(1) 四大仏蹟のルンビニ、クシナガラ、サルナート(鹿野苑)ブダガヤはおのおの復興され、道路もよく、交通機関も整備されていることは予想に反して、多大の喜びを与えた。これにはインド政府の深い理解と財的援助とが与つて力がある。この中で最も整備されているのはサルナートであつた。インド政府のレストハウス、セーロン僧の初転法輪寺、大菩提会の施設優秀な博物館も存在する。たゞ仏陀入滅の地クシナガラは目下整備中ではあるが、意外に殺風景な感じがたまはる。茶見所の森を伐採したことはまことに遺憾である。これら仏蹟の復興は喜ぶべきであるが、仏塔を新しく磨き出したり仏像を金ピカに塗ることは如何かと思ふ。やはり古色をそのままに保存して、古えを偲ばせてほしいものである。

(2) 四大仏蹟以外に我々は祇園精舎舎衛城の旧跡、鷲鷲山、ナーラン

ダ大学、王舎城の旧跡を見学した
祇園精舎とナールンダ大学の旧跡
は驚異に価する。靈鷲山はかなり
の山であるが、その頂上からの景
観はすばらしい。日蓮(天台)、浄
土、禪のいずれにも関係ない山で
あるが、予期に反して広くない。
多くの弟子が集り得る場所とは考
えられない。いずれも道路がアス
ファルトで整備され、行くに不便
を感じない。これらはあまり人工
的に修飾されず、旧態のままであ
ることは極めて喜ばしい。

(3) そのほか宗教美術の上で重要な
アジャンタ、エローラ、サールンチ
エレフアンタ、タジ・マハール等
の洞窟や古跡を巡拝したが、その
スケールの大きいこと、作品の優
れていることは一驚を喫せざるを
得ない。仏教の作品は多く静的で
宗教味豊かであるが、印度教のそ
れは動的で、エロティックである
その作品は一般に紹介されている
が、さらに芸術的に深く研究すべ
きものが多い。要するに、(1)四大
仏跡の復興は喜ぶべきであるが、
その俗悪化は警戒すべく、(2)祇園
精舎ナールンダ大学の整備は注意
深く行われ喜ぶべく、(3)竹林精
舎の跡はムスリム化して悲しむべ
く、場所を確定して復興の要あり
(4)アジャンタ・エローラ等宗教美
術の保存には万全を期すべく、さ
らに研究に価するものが多く、(5)
古跡に博物館の設けられているこ
とは喜ぶべく、今後さらに増設さ
れることが望ましい。

(三) 帰国後の決意

(1) インド副大統領ラダクリシヌナ
ン、首相ネル、判事パール等の
指導者を思想的に且つ政策的に支
えているものは、アショークカ王の
正法による国家統治の原理である
アショークカ王はカリンガ討伐以来

戦争による罪業を悔い、仏教に帰
して、正法による政治を実施し、
その版図が著しく増大した。イン
ドの指導者を強く動かした。イン
ドの正法はアショークカ王の懐いた国家
統治の原理である。従つてインド
の国旗はサフラン色白色緑色で、
奉仕、生成、清浄の三徳をあらわ
し、真中に法輪が描かれている。
国家の紋章はアショークカ王の石柱
である。その石柱はサールナート
から出たもので実物は今その博
物館にある。四方に獅子像を連れ
法輪を刻した台座があり、最下に
蓮とその茎が配されている。

(2) アショークカ王を精神的に支配し
たものは仏陀の大智と大悲とであ
る。インドの指導者は仏陀の大智
にあこがれてそれに包まれる科学
の振興をめざし大悲にしたがつて
世界の平和を嚮望している。彼等
はインドが仏陀を生んだことを誇
りとし、その深奥な文化に強い自
信を有する。我々が会見したネー
ルやパールないしラダクリシヌナ
ンも同意見である。今やウエーサ
カの日には仏陀を記念する祭日とさ
れ、一般に休務する。

(3) ガンジーの努力により、極端な
差別待遇を受けた最下層の不可触
賤民の名は除かれ、ハリジャー
(神の子)の名の下に平等に取扱わ
れるようになった。仏陀の四姓平
等の精神はここに生かされ、この
カースト出身のアンベデーカ博士
(ネパール会議の直後死去)は印
度教を信ずる不可触賤民五十万を
仏教徒に改宗させている。

(4) 今後南北両仏教徒は打つて一丸
となり、仏陀の精神を世界に宣揚
し、正法による恒久平和を将来す
べきである。我々は仏教徒として
の自覚に立つて、無私の利他行に
精勵し、深い反省のもと奉仕の下
座行に徹したいと思う。

南北仏教交流のため

私はかく希望する

結城 令 聞

(東京大学教授・文博)

会議の最終日、「学者による
討議に於て」インドのアンベ
デーカ博士、イギリスのクリス
マス、ハンフレイズ、日本の
結城令聞氏に於つて会議の現
在並に将来に對する発言があ
つた。結城博士は、この会議
が本當の成果をあげるために
は、参加国の仏教が、相互に
理解され尊敬されることを基
礎とせねばならぬのに、必ず
しも然うではなく、特殊の色
彩によつて引ずられていた様
な感を懐いたので、日本仏教
代表と云う立場から、日本仏
教のために発言したと云う。
結城博士の講演は日本語で行
なわれ、静岡大学石井真峰教
授によつて通訳された。

一、仏陀の眞精神こそ尊ばるべき
である

国王、王妃、その他この會議の
成功の爲に、努力を傾けられたこ
の国の人々に感謝をささげます。
アメリカ國籍の仏教徒である私の
友人から、最近次の様な書簡が参
りました。アメリカで仏陀の精神
を普及するためには、仏教は南方
のテーラバーダの形のまゝでも、
又日本仏教の形のまゝでも困難で
ある。精神は一つでも形はアメリ
カの社会に適応する様にされねば
ならないと。日本の仏教徒は、こ
の言葉に誰一人とし異論を唱える
者はありません。それは二千五百
年の仏教の歩みが然うであつたこ
とを承知しているからであります
然るに私は、今回の大会に出席し
て、この當然の言葉が、今一度、

吾々皆で味わわねばならぬ新らし
い意味を持つものであることを発
見しました。

私共の研究によると、仏陀の精
神が世界的に普及した、又普及す
ためには恰も水の方円の器に隨
う如く、時と処とに応じて、それ
に適する形となつて人々の心に滲
透した、又するからであります。
然し歴史的にこれを研究してみ
ると、それは決して自然のなりゆき
からではなく、実に、それぞれの
国に於ける先輩達が、本當に仏陀
の精神を理解し、それをその国
の人々のものとなる様にしたから
あります。中国の隨、唐、日本の
鎌倉時代に於ける高僧達は、本當
にその役目を果し得たのであつて
それによつてこそ、仏陀は中国人
の仏陀となり、日本人の仏陀とな
つたのであります。

二、日本における仏教研究の根本
的態度

今日ここに集つてゐる人々の國
の仏教史に於ても、又こうした仏
教の展開が行なわれていることだ
らうと考え、私は皆様方の國の仏
教に對して無限の尊敬を払い度
いと思ひます。歴史的にみて、同一
仏陀の精神が、時と処で形を変え
得るといふことは、仏陀の精神が
生きてゐる証候であつて、形を変
へ得ない様では、それは過去の記
念物であるに過ぎないのでありま
す。吾々日本仏教徒は、二千五百
年以前に、ニルバーナを示した仏
陀を、現在もなお吾々の前に於て
新しい社会での生き方について
吾々を指導し、將來も指導するで
あらうと信じてゐるのであります
人間は誰でも、他よりも自己を
高く評価し度い本能を持つていま
す。それが争ひの本となるので仏
陀はそれを戒められました。大乘
では、自己をほめ他をそしめること

を戒律の一つとして重大視してい
ます。この大乘の戒律を守るため
のよい方法の一つは、善意を以て
他を理解することであり、その
方法として採用されてゐます。日
本では、先づ自己の属しない他の
仏教を研究することから、仏教の
研究は手始められます。そして自
己の所属する仏教は最後に研究す
ることにしてゐます。これは昔か
ら採用されてゐる研究方法であり
ますが、現在でも仏教徒によつて
立てられた数十の大学、専門學校、
或は印度哲学、仏教學の講座を持
つ国立大学では、皆こうした研究
方法を採用してゐます。

三、日本の大学における仏教研究
の実情

日本の大学では、多くの学者が
パリー語の仏教、サンスクリット
語の仏教、西蔵語の仏教、中国の
仏教、日本の仏教等を、各々専門
を分つて専門的に研究に従事して
います。それだけではなく、仏教
の彫刻、繪画、建築、或は印度哲
学、梵文学等に至るまで、専門
的に手わけをして研究してしま
うから日本の仏教教育では、自國
と異つた形の仏教に對しても、善
意を以て理解し得る様な構造を持
つて居り、事實日本の仏教徒は、
皆様方の國の仏教に對して尊敬の
念を持つてゐます。パリー語のツ
リビタカが日本語に訳されたのは
十数年の昔のことです。アサンガ
ヤヴァンパンドウのビジユニヤ
ナ、バーダの伝統的研究は、日本
では千數百年間の実績を持つて居
り、近年はそれにサンスキリット
語や西蔵語のテキストをも合せて
研究して色々の業績が発表されて
います。チベットアンツリビタカも
今印刷されつゝあります。中国の
仏教文献についての研究は、申上

げないでも御諒解下されると思いますが。

四、南北仏教相互理解の現状

今回の会議に出席して私の驚いた一つのことは、皆様方が口にして大乗と、私共の理解している大乗と、その内容が余りにも隔つていないことである。大乗と仏陀との関係については、日本や中国の大乗は、最も仏陀に近い時代のマハーヤーナ・スートラを通じて仏阿の精神を体し、又印度の大乗の哲学者、ナガールジュナ、アサンガ、ヴァスヴァンドウ、アシユワゴシヤヤ、中国の高僧達、思想を通して大乗の哲学を研究し、その基礎の上に、然も日本の社会的条件や、自然的条件に適合する様に打立てられていす。

それだからと云つて、私は私の国と異つたこの国の大乗を、毛頭疎略にするものではない。大乗が、日本の高僧空海が、中国に留學していた才七世紀頃のことであるが、空海はこの種類の大乗の中から、実に立派なものを発見し、高遠な仏教哲学を建設したものであります。私共は、又こうした形となることによつて、印度に仏教を持ち帰った、この国の大乗の歴史的功績を忘れてはならないと思ひます。

私共が、私の国の大学で、皆様方の属している仏教を学問的に研究していると同様に、皆様方も亦日本や中国の大乗を学問的に研究して下されてはどうか。若し然うであるならば私共は仏教の世界的飛躍を企図しているこの会議の将来に対して、本当に光榮ある望みをかけらうと思ひます。この会議の偉大なる目的達成のための力は、世界仏教徒が、

本当に他の仏教を、善意を以て理解し得ることから発足せねばならないからであります。

五、私の希望

次に私は、又斯う云う希望をこの会議に寄せたのであります。それは、この会議の重大な目標として、仏教に於ては、見れば発見し得ない、今日並びに将来の世界人類への貢献を確認することであり、この意味の問題の発見、場所であり、討議の場所でないならば、熱意ある仏教徒の熱情は燃え上り難いのではないかと思ひます。然かも若し、斯うした問題の討議の場所となりうるならば、そのためにたとい時間がかかるとしても、或る言葉が、或る人には自由であるが、他には困難であるとも云う様な討議の形式を探らないで、誰でもが、意見を吐き得ると云う位の寛容さと真剣さを示し時間をおいて研究する必要があると思ひます。有難う御座いました。

官民一致の歓迎と接待

石川 存 靜
(日蓮宗々会副議長)

一、ピース、マンシヨン(平和館)での歓待

私たちが、昭和三十一年十二月十四日の正午近くに、カトマンズ市郊外の田畑に囲まれた小さなガウチヤル飛行場に着くと、サリイ(印度の婦人服)を着飾つた美しい乙女たちがレイを持って出迎えてくれた。飛行場の外には大きな天幕が張つてあり、草原の上に直接絨毯を敷き、椅子がいくつも置いてあつた。私たちは其処で冷めたいオレンジジュースの接待を受けながら、ヒマラヤ連峰を眺め、

乙女たちにマナスルはどれか、エズレストはどれかと尋ねた。だが、両方とも其処からは見えなかつた。やがて、私たちは相当にお粗末なバスでカトマンズに運ばれたのだが、乙女たちや青年諸君が一語に乗つて、日本のマナスル登山隊の話をしてくれた。登山隊諸氏のネパールに与えた日本人の印象は素晴らしい。その賞讃の言葉を聞いてみると、何となく私たちの肩身が広くなるのを覚えた。

カトマンズ市を横切り、低い丘陵を東へ約一哩ほど走つて、三階建の立派な白亜館の前に着いた。それは政府の迎賓館で、五月の戴冠式の時には各国の大公使や印度の副大統領が泊つたところだと聞いた。名称をスイトラ・ニヴァスというので、「涼しい館」の意味になる。十二月はネパールの冬なのだが、日本の六月末の暑さだ。暑い国だから、「涼しい」という名を付けたのにちがいないが、現在の世界の緊張を和らげて涼しくするといふ意味から、私が「平和館」・マンシヨンの英訳を提案したら、ネパールの若人たちは直ちに「イニス」を叫んでくれた。此の国に到着してから僅か一時間そこそこで、こんな言葉を交えられるほどに、ネパール人は愛想がいい。この迎賓館の才一階には広いホールがあり、会議は其処で開かれたのである。私は、村野宣忠、野依秀市、舟橋一哉、別所弘因の四氏と共に二階の広い部屋を割当てられた。絨毯を敷きしめ、白い蚊帳のついたクッションのいゝ寝台を部屋の三方に置き、中央にはソファとテーブルと肘かけ椅子のセットがあつた。シート毛布もあつた。部屋毎の専用の浴室をのぞくと、浴槽は大きく、シャワーもあり、湯も出た。僧院の

一室をあてがわれ、寝台もなく、毛布にくるまつて寝ることを覚悟していただけた。但し長老と団長と数名の人はアナンド・クティヴィハラという寺院に泊つたが、其処は迎賓館のようには行かなかつた。

二、ネパール要人大会準備の苦勞

今回の会議を開くに當つて、ネパールのテラーヴァタダ仏教界の大立者であるアマリタナンド長老シユリヤ・バハドル・シヤキヤ教授、マニハルシヤ・ジョティ氏及び国王の秘書長(わが国の宮内庁長官に當る)ロケ・ダルシヤナ氏とは、世界各国の人を三百人以上も集めて七日間という長期の会議をするのが、ネパール固有の史以來最初の経験なので、その接待準備や会議次才の編成には随分と気を配り、三月にはセイロンに飛んでWFB会長マララセーケラ博士及び十四箇国の代表と会して相談をした。彼等は帰国後、国王と政府に進言し、政府の要人と仏教会幹部をもつて構成する準備委員会をつくり、ダルシヤナ氏が委員長となつた。この委員会は準政府委員会なのである。その結果、シユリ・タンカ・ブラサド・アチャリヤ首相を主理とする内閣は、会議費用の国庫支出を決定し、更に積尊降誕の聖地ルムビニ園及びそれに通ずる道路の整備のために百五十万(五十万)の支出を行つた。勿論ジョティ氏をはじめ多くの民間人の寄附もあつた。

接待のためには、食事は辛味と香料をつけた印度風にしないうり料理人に吹風の調理を教育し、迎賓館の各部屋には専属のボーイを配して、ベッド作りや、私たちの身の廻りの世話や、外出中の荷物番をさせ、英語に通じた数十人の青年男女を動員して通訳兼案内係とした。彼等の中にはハイ・スクールやカレッジを卒業した者もいた。大部分は在學生であつた。カトマンズ市内の各学校は会議期間中を休みにしたのである。私たちの外出には無料バスのほか、に四人なり、五人なりを一組として無料の自動車を提供し、各組に一名の通訳がついた。革命後のネパールを全世界に紹介しようとする熱意に燃えた国王をはじめ、關係はもとより官民一致の、文字通りに国を挙げての接待だったので、何処の国の代表も「ネパールがこれほどのことをするとは思わなかつた」と驚嘆して、「ヴェリー・グッド・アレインヂメント」非常に立派な支度ですね」を連発して、東京の会議のことを思い出して、当時の外務局長をつとめた私は、国情が異なるとはいへ、恥づかしさのために顔を赤くしたのである。

三、會議の在り方と將來への反省
然し、此処で考えねばならないことがある。それは世界仏教徒會議が、主權国の仏教文化の紹介と各国仏教徒の親善友好を温める交歓とに重点を置きすぎて来たことである。私たちは十二月十四日にカトマンズ市に着き、二十一日の朝同市を離れたのだが、この滞在期間七泊八日約百四十時間を私のメモによつて区分すると、睡眠食事休養が七十時間、国王、首相、国王秘書長、將軍等の招待会出席に十時間、市内外見學と市民歡迎會に二十時間、古い民謡や演劇映画等の各種の催し物に十時間、日本代表団だけの打合會に三時間で會議出席に十八時間、自由使用に十時間となつてゐる。會議も形式的なものに多くの時間を要したのだから實際に討議したのは、部会で四時間、總會で三時間である。

ネパール国官民の熱誠溢れる準備と接待に答えるのに、私たちは不勉強であつた。次回は仏教を国教として迎える泰国内から、随分と盛んな歓迎が行なわれると期待されるが、このへんで日本からWFB本部に提案し、会議がその名の示す如く審議に重点を置くようにすべきだと思ふ。世界の緊張と仏教徒の使命を勘案すると、会議運営の転換期が来ていることを感ぜざるを得ない。

ネパール大会所感

村野 宣忠

(ヤングイースト社)

一、今回の会議の実態
今回の会議の内容については目下石川氏と共に詳細の報告の準備をすゝめているが、全体の印象としては既に会議も四回を重ねたので単なる抽象的な放言が少なくなつて、もつと具体的な方策を練らうという意欲が強くなつたことが認められる。これは当然なことであるが、これは比喩に仏教徒の組織の組織が貧弱であることはお話しにならない。仏教徒会議は飽く迄も仏教徒会議であつて世界宗教会議ではないのであるから各宗教と提携するという態度はとらなくともよい。仏教徒は仏教が世界最高の宗教であるという信念を持つていて、管であるから、基督教其他の宗教に對立して仏教を世界に弘めるといふ目的に向つて邁進すればよい。ただそれが空理空論であつてはならぬ。現在の世界は空論をもたせざるに、問題はもつと具体的な生活的なところにある。それは平和問題である。これは決してなまやさしい問題ではない。口に平和を唱えるのはやさしいが、

実際に戦争を阻止するといふことが如何に困難であるかは全く個人対個人の摩擦の場合と同様である。これには先ず国連に意見を具申するという方法が考えられる。しかしそれには先ず世界仏教徒の意見の一致を見なければならぬ。WFBの組織と人。これは組織が最も大切な要素となる。今回の会議に於てWFBの再組織が特に一つの部会の下に検討されたのは当然である。しかし如何に組織が立派に出来上がるよりも、これを實際に運営しなければならぬ。実際の運営は各人の自覚に待つ外はない。そしてこの自覚を喚起する最もよい方法は世界の仏教界の實態を常に知らしめるといふことである。日本の仏教徒は特にこのことが必要である。宗教が元來排他的であることはやむを得ないとしてもあまりに排他的であることは世界の仏教徒としての組織力を減退して、徒らに他宗教をして跳梁せしめ、仏陀の真意が世界に伝はることを妨げる。

二、インド国民と仏教

印度は殆んどヒンズー教徒であるが、ヒンズーに於ては仏陀をも礼拝するばかりでなく、印度国民は印度が自尊心を生んだことを無上の光榮として居る。印度の国旗の中央にはアシカ大王の採用した仏教の象徴たる法輪が描かれて居る。印度はその國政の原理を仏陀に仰いで居るのである。大統領ブラサドも副大統領ラマダクリシナンも、首相ネルも、仏を讃え法を説き、仏の平和原理により印度を治め世界に臨まんとして居るこの点から見れば仏教國であるといつても差支へはない。今回印度政府の主催で仏紀二千五百年祭が行われたのも仏教が、かくの如く印度の國教的性格を持つて居るが

故である。セイロンにしてもビルマにしてもタイにしてもチベットにしても、又中国に於ても、その国内に於て仏教は仏教として存在し宗派の分立は単に法類的差別を出ない。しかるに日本は宗派の差別が甚だしくむしろ宗派以外に仏教がない、というのが妥当である。この状態は日本仏教の本質をなすもので永久的にこの状態を脱却することは不可能であらう。だから我々はこの宗派的差別を撤廃するといふ徒勞はやめて、むしろ直接に海外に接することによつて、仏教徒の自覚に到達するといふ逆説的な方法に依る外はない。

三、日本仏教への反省

このためにはニュースの交換、學生の海外派遣、特に語学の奨励が緊急事である。國際會議に出席して通訳を通じてでなければ相手のいふことも判らなければ、自分の意見もいえないようでは出席しても無駄である。英語などというものはお寺には用はないとして自らも勉強せず、弟子が勉強するのも喜ばなかつた非國際性が、今になつて、その悪報を受けて居るに違いない。鎌倉時代に唐僧が日本に渡來して法を伝えた。彼らは日本語を解しなかつた。日本の僧が支那語を解し得たから彼等の伝道が成功したのである。即ち当時の日本僧は外國語に熟達していたのである。外國語の習得に努力していたのである。そういう日本の先輩が外國語を軽蔑していたために、國際會議に出席しても当然占むべき椅子をむさ／＼と南方仏教徒に取られてしまふ。このまゝで行くと世界仏教徒は日本を尊敬はするが敬遠して彼等だけで事を運んでしまひ、結果的には日本は置去りにされるであらうというのが私の

今度の會議終了後のいつわらざる実感である

ネパール大会から見た日本の國際佛教の今後について

山本 杉

(全日仏協理事長・医博)

一、世界會議の在り方
世界佛教徒會議も回を重ねること四回、ネパール大会も無事終了した。仏教徒のひとりとしてまことによこばしいと思ふものである。しかし私は日本での大会に重ねてビルマでの大会、更にこの度ネパールの大会にまた／＼加わり得てつく／＼思うことは、この會議がこれよりよいかということであつた。ビルマでの大会に際しては深く日本代表として反省しなればならない点について考えさせられたが、そして、こんどの大会にこれらの反省点が解消していかんとは考えられなかつたが、これは敢えて別問題となつた。こんどの大会では、大会自体に大きな問題あることを感じたのである。それは、きびしい世界情勢のなかで、特に日本を含めた印度や中共の今後のありかたを考へるとき、アジアに於けるこの大会は、このまゝでよいかどうかということであつた。そこに日本佛教徒として考へた。あらたな段階に行動を起さなければならぬ点を、あまりにはつきりと大きく痛感したからである。それは世界情勢はこの佛教徒會議を単なるセレモニーとして許さなくなつて居るということである。こんどの大会にあらたに参加したのは、中共とソ連であつた。それが決して赤い佛教ではなかつたことをこゝに特筆して私は印度の舞台に移さなければならぬ。印度

に於て、ネールが彼の考へている革命の本態について、じつくりと語つたのをきいたとき、私はこの感を深くしたのである。それは権力による革命は革命でなく、ひとびとの心をおきかへることによつてのみ本当の革命はなしとげられる。といつたことはである。彼が印度に發生した仏陀の思想を、もう一度自分たちのものにするこゝによつて大きな印度の革命及び世界の革命はなしとげられるとはつきりと信じて居る。私もまたこれこそ世界の齒車を動かしてゆく根本の思想であるとうけとつたのである。

こゝに思いをいたしたとき、おのづから世界佛教徒會議のありかたははつきりしているのではなからうか。そのいみに於てこんどの會議がものたりないものであつたことははつきりといえると思ふ。會議自体の幼稚な点は勿論、イニシヤチーブをとつて居る。一、二の代表の自分よりな発言、更に個人的な情実による役員選考、提案議題が世界の知的水準からあまりにも低すぎることを私はいやというほど感じた。そしてこれに對してキヤスチングポートの握ることのできない日本佛教界の現状を顧みたと、何が原因であるかを考へざるを得なかつた。全仏の弱体、國際局の未完成、これはこんどの参加者のひとしく共通の意見とするところであつたけれども、私も深くこの点を考へるものである。

二、今後の國際會議への希望

この國際會議がたゞわんざとよりに集つて他國の人とおつきあひをするところではなく、佛教徒の理想とするところ、佛教徒の果さなければならぬ当代への役割を會議することによつて意義づけ、その

もここでは書けない。国外旅行者のために気附くことを印刷して置いて配布し各自気をつけるのもよいことであろうが、食事作法の如きものでも、その他のことでもわか仕込みは板につかない。日本では平気で通用することも海外では通用しない。以上二三氣づいたことを綴らせ頂いた。妄言多謝。

(十二月二十九日夜)

インド、ネパール 旅行記

赤松 常子
(参議院議員)

短かい時日の間に、表面だけをなでただけの旅行者の感想にすぎませんが、一言記します。

私にとつては、今度のインド旅行は、二度目の旅行でありました。前に比べて、汽車で大陸を横断したので、割合に農村や地方都市の事情にふれることが出来て幸に思いました。

釈尊が古へ生誕された北インド(今はネパール領)及び、八十余年の生涯を送られたインドに、今日仏教の影がほとんど影をひそめている姿は、私共日本仏教徒にとつては、淋しい限りでありましたが、しかし今日のインドの新しい前進の支へに、仏教が宗教としてではなく、社会改革の理念として、復活しつゝあることは、強く思われそのことは又、現在の日本仏教徒としても考えねばならぬ課題であると痛感しました。

具体的な現はれとして、カースト制度がいかにインド社会の因習の痛であるかは論じる必要もありませんが、ヒンズー教はその現状を維持する態度をとっているに反し、仏教は平等思想をふりかざして、その打破を説いています。現

に仏教の浸透している階層は、カーストの最下層の不可触民層です。人間に非ずとされている賤民も、等しく仏の子として蘇りつゝあるこの事實は、まさしく仏教が社会改革をなしつつあると云へませう。ごく最近も、ヒンズー教から仏教への改宗者が約三十万人に及んだことも耳に致しました。

又、大地主と、農具や種干すら買へない貧窮農民の間に、ブータン運動(土地喜捨運動)がかけ橋となつて、争いによつて土地を獲得するのではなく、両者が了解の上立つて土地を分ける美しい平均化運動が展開されています。この動きはガンधीの弟子の一人、ミノマデーが、ビハール州で始めましたが、今では三分の一の土地が農民の手に解放されました。

その理念も「全ての人と同じであり、一つである。心によつて結ばねばならない」と言う仏教思想が、強く打ち出され、それが地主と農民に共通の心を呼びさまして成功してゐます。

こう言ふ風に、都市にあつて又農村において、社会の不均衡を是正し、不正をため直し、不幸な人々を引き上げる政治理念の根本に、仏教思想が大きく動いてゐることは、仏教思想が常に新しいことをも教へてゐます。ネール首相もこゝを拠点として、最近の国民会議派の大会でも社会主義協同国家の構想を説き、新しいインドの国づくりを押しすすめてゐます。

日本の仏教者も、真に釈尊の教理に徹すれば、伽藍のみ閉ぢこもることなく、一人をよしとするのみでなく、現状を維持することとなく、社会主義の方向へ眼を向けるべきではないでせうか。

次に、ネパールの会議にあつても、又インドの各地でも、日本仏教の弱点の一つとしてつつかれたこ

とは、余にも多宗派に分れてゐることでありました。それに引きかへ、南方仏教は釈尊に直結してゐて仏教は一つの宗団として育ち、又受け入れられてゐます。過去に於いて、日本の仏教が多様多彩に開花した時期があつたことを示してもゐますが、現在ではそれがかつて押をつくり、排他的になりすぎてゐるようです。そしてあまりにも宗祖に執しすぎて、逆に釈尊から遠ざかる結果になつてゐると思れます。

ネパール会議でも、今後大乗、小乗の言葉や押を止揚して、全一なる方向へ仏教をより発展させようとなつて決意されました。この決意の意図する考えを、日本の仏教界にもあてはめて、釈尊を中心に大きな法輪を作りたいと私は教えられました。

セイロン訪問代表 元氣て出発

長井真琴博士(本会副会長)を団長、阿部竜電師(事務総長)を事務長とする九名の日本仏教代表のKLM機でセイロンへ向け元氣一杯出発した。空港には各本山代表者、信徒、家族を初め関係者多数が見送つた。代表団は翌十二日には早くもセイロンの首都コロンプ市に到着し、約二週余りの間、仏教の歴史、約二週余りの間、阿部事務長ら一部は一月廿四日午前六時半にコロンプを立ち、シムガポール、ホンコンにそれぞれ一泊した後、一月廿六日午後八時十分空路BC機にて羽田に帰着する。なを他の代表団はコロンプ市よりインド国ボンベイ市に到着、仏教巡拝後、一月卅一日夜カルクッタ空港発、バンコック、ホンコン經由で二月二日午後八時十分羽田

へ帰着する事になつてゐる。本会国際局では同代表団の出発に際し日本セイロン協会の協力の下、「日本仏教写真集」を数十冊セイロンへ記念として持参し、各方面へ配布贈呈した。(別掲)を初め本会々長大谷光熙、全日仏婦会長大谷智子、東本願寺異方等のメツセージが寄せられた。

メツセージ

此の一月の満月の日のデュルトウ満月の祭典に出席すべく、多くの我国仏教徒の代表に對して招請状を賜りましたセイロン政府の御好意に對し、感謝の意を表するものであります。私はセイロンと日本との間の強い友情と深い相互理解が我々の常に信奉している仏教を通じて再び強化され、その事が更に世界平和の基礎の建設を大いなるものにする事を確信するものであります。

日本国総理大臣 石橋湛山

セイロン高僧

バナティツサ長老来日

セイロン国高僧バナティツサ長老比丘は、去る一月二日夜BC機にて空路羽田に到着した。同師はインド国デリー市に於けるユネスコ総会に出席後東南アジア各国を歴訪し、今回ユネスコのスカラシップにより来日、日本仏教文化史等研究する為、約六ヶ月間本邦に滞在する事になつてゐる。同師はミリタリ、チャブレンとして前内閣及現内閣首脳と緊密なる関係を有する高僧であるとのこと。亦今回セイロンを訪問した日本仏教代表団の壮行会にも出席して激励の言葉を述べた。なお本会としては同氏の歓迎会は訪代表団帰国後に開催すべく種々計画中である。

セイロン独立記念祭に 仏教界代表多数招かる

セイロン国の九回独立記念日にあたる二月四日(月)午後四時よりセイロン大使館主催の記念祭が東京芝高輪光輪閣にて、内外の名士多数を招いて開かれることになつた。当日は本会幹部を始め宗派学者、仏青仏婦等の代表が招かれることになつてをり今からその盛況が予想されている。

広島で平和仏舎利塔 建設資金の贈呈式

全仏では、去るネパール大会の折、中国仏教協会(中共)より贈られた広島市の平和仏舎利塔建設資金(十五万円)の贈呈式を兼ねてネパール大会報告会を広島で開くよう準備を進めているが、一月末に右式典と報告会が開催される見通しである。なおこの機会に広島県仏教会の組織確立と強化のための方策も打出されることになつてゐる。

修験宗、岡山縣仏から 救恤金

去る十二月初め、日本赤十字社よりの協力申入れに基き、全仏では各加盟団体に對してエジプト、ハンガリー、動乱犠牲者救恤運動へ協力するよう要請を發したところ(前号既報)各加盟団体ではそれらの地域の諸団体と協同して、或は独自にこの運動に参加して成果をあげた。なお修験宗本庁、岡山県仏教会からそれぞれ、全仏事務局宛に救恤金が寄せられた。日赤へ納金された。全仏当局では、時間的に差迫つた要請であつたにも拘らず、各加盟団体が協力がなされたことに深い敬意と感謝を捧げている。

日本佛教代表中国佛紀二千五百年祭に

戦後初の訪問……

今春五月初旬中国本土に於て開催される佛紀二千五百年祝典に、十五名の日本仏教徒が中国仏教協会より招聘されたが、今回本会事務総長名をもつて各宗派総長、各府県仏会長及各団体代表者あて代表推薦方依頼状を送付した。本会の意向としては本会派遣代表団は四月末日出発、メーデーの五月一日までには中国へ到着し仏紀祝典に出席の後は、支中寺、五台山、天台山等仏教に由緒ある有名仏跡寺院を巡拝し約一ヶ月滞在する様計画しているが、日程は一切招聘国側に一任してある。推薦の条件については本会加盟各宗派、団体の管長、総長、代表者、さきさき指名招待されたもの、中国仏教研究の学者、将来性ある中堅僧、仏青仏婦、尼僧の代表者、その他であり、経費は羽田、香港往復の航空賃その他一切を含め十五万円位である。なお推薦された各代表を本会で設置された総務委員会に決定し、常務理事会にて報告承認の上招聘国へ通報する事になつて、申請手續については各宗派、団体の代表者の推薦状二通、履歴書二通を二月五日までに本会国際局へ提出する事になつてゐる。中国への正式訪問は戦後初めてなので相当地の希望が有ると思われるので本会としては今から其の準備に万全を期している。

在中国邦人遺骨

調査について

金仏各宗団によびかける
金仏では、昨年末中華人民共和国紅十字会李徳全会長より在中国

中国仏教会 章嘉大師帰国

昨年十月下旬病氣治療の為、台湾より空路羽田に到着、其後国立千葉病院にて治療を受けていた中国仏教会重鎮章嘉大師は、その後経過は好くなり、一月十一日退院し、去る一月十五日午前一時羽田発のNW機にて随員らと共に帰国した。此の日空港には長岡東京仏教団理事長、倉持瑞玉泉仏教会長、金仏から別所部長が見送つた

新年の決意新たに

理事会、常務理事会開かる

金仏では新年初頭の一月十日午後二時から築地本願寺に於て、常務理事会及び理事会を開催し全仏当面の緊急問題及び金仏の本質的問題に関して熱心なる研究討議が行われた。当日の出席者並に協議決定事項左の通り。

◎常務理事会

佐々木泰翁、倉持秀峰、渡辺真海、竹村教智、太田淳昭、前田宥和、平林宥高、中山理々、重永潜、山本杉、栗本俊道、米山久、岩野真雄、猪俣興一
以上十四氏

◎理事会

佐々木泰翁、倉持秀峰、竹村教智、米山久、栗本俊道、渡辺真海、前田宥和、中山理々、平林宥高、岩野真雄、猪俣興一、山本杉、重永潜、佐瀬淳光、増永需鳳、菅原栄海、朽木正巳、浜田本悠、小笠原義雄、阿部竜伝
以上二十氏

◎協議決定並報告事項

1. 人事について
△事務総長に阿部竜伝氏、総務局長に小笠原義雄氏を任命、国際局長に久保田正文氏を選出し依

中国仏教会 章嘉大師帰国

昨年十月下旬病氣治療の為、台湾より空路羽田に到着、其後国立千葉病院にて治療を受けていた中国仏教会重鎮章嘉大師は、その後経過は好くなり、一月十一日退院し、去る一月十五日午前一時羽田発のNW機にて随員らと共に帰国した。此の日空港には長岡東京仏教団理事長、倉持瑞玉泉仏教会長、金仏から別所部長が見送つた

理事会、常務理事会開かる

金仏では新年初頭の一月十日午後二時から築地本願寺に於て、常務理事会及び理事会を開催し全仏当面の緊急問題及び金仏の本質的問題に関して熱心なる研究討議が行われた。当日の出席者並に協議決定事項左の通り。

◎常務理事会

佐々木泰翁、倉持秀峰、渡辺真海、竹村教智、太田淳昭、前田宥和、平林宥高、中山理々、重永潜、山本杉、栗本俊道、米山久、岩野真雄、猪俣興一
以上十四氏

◎理事会

佐々木泰翁、倉持秀峰、竹村教智、米山久、栗本俊道、渡辺真海、前田宥和、中山理々、平林宥高、岩野真雄、猪俣興一、山本杉、重永潜、佐瀬淳光、増永需鳳、菅原栄海、朽木正巳、浜田本悠、小笠原義雄、阿部竜伝
以上二十氏

◎協議決定並報告事項

1. 人事について
△事務総長に阿部竜伝氏、総務局長に小笠原義雄氏を任命、国際局長に久保田正文氏を選出し依

沖繩問題解決に 一層の努力を

沖繩連年頭の幹事会開催

本会も加盟してその運動に協力してきた沖繩問題解決国民運動連絡会議では、去る一月十六日午後二時より衆院会館で本年初の幹事会を開き、本年度の運動方針、計画等について協議した。席上折から来日中の琉球立法院議員大湾氏から瀨長那覇市長就任後の沖繩事情を聴き、「いかなる市長であろうと市民によつて民主的に選ばれた市長に対して、民主的ルールを無視した米軍の干渉は許さるべきではない」との立場から、米大統領並に日本国会に対して、事態を速やかに正常にもどす努力をするよう要請することが決定された。

宗教法人法の 改正を撓つて

去る一月十七日宗教問題研究所主催で、現在世界の関心事である標記の座談会が山谷会堂（浜田本悠氏）で開かれ全仏から佐々木理事長、小笠原局長が出席した。先づ佐々木理事長の問題提起の後、座談会では、信教の自由の原則は尊重されるべきだが、そうかといつて公益を害するような擬似宗教の存在は放任するべきではなく、何らかの形で規制（官僚統制ではなく、例えば宗教界による自主的な規制などによつて）加えらるべきこと、非包括法人の離脱の

村山正榮氏逝去

(宮城県連会長)

本会常務理事、宮城県連盟会長村山正榮氏は予ねて病氣静養中のところ、去る十二月二十六日逝去、二十二日告別式が行われた。同氏は県連会長としてその組織強化の任に当たると共に、本会常務理事として活躍されていたので、その逝去は各方面から悼まれてゐる。

あとがき

○才二十三号を漸く送り出すことになつた。ネパール、インド派遣代表各位から御多忙の処まけて玉稿をお寄せ頂いたこと、衷心からお礼を申し上げます。この他更に代表団の教名の方にお願ひ、締切を二週間ほどのほしてお待ちしたが拝受出来なかつたのは残念、何れ到着次第順次けいさいの予定

○この号から編集の形式を少し変更したが、之は今迄より更に原稿を沢山入れたく且毎号全日仏の目標を高くかかげてゆきたい念願から合議の結果改めたわけ。等に出る限りの各宗派、仏教会等の生きた活動状況を広くとり入れた

○全国的皆様の寄稿、投書をお待ちする次才○尙希望部教もどし、弘報部宛お便り願ひたい。予算の許す限り御希望に添えたい

○建設的御意見等更にお寄せ願ひ全国の皆様でこの機関紙を育てて頂きたいことを特に願ひする次第です。

(たか)